

学習障害（LD）等の子どもたちへの 理解と支援のために

学級の中には、学習につまずきのある子ども、落ち着きがない子ども、注意集中が難しい子ども、友だちとトラブルが絶えない子どもなど、いろいろなタイプの子どもたちがいます。

その中に、学習障害（LD）や注意欠陥／多動性障害（ADHD）等の子どもたちがいる場合があります。

このパンフレットは、このような子どもたちの障害についてきちんと理解するとともに、一人一人の子どもの学習や活動のつまずき、困難に対する支援について考えていくためのものです。



島根県教育委員会

学習障害(LD)ってなあに？

Learning Disabilities

「学習障害」とは、聞く・話す・読む・書く・計算する又は推論する能力のうち、特定のものの習得と使用に著しい困難を示すさまざまな状態を指します。

「学習障害」の原因は、中枢神経系の何らかの機能障害と推定されており、視覚障害・聴覚障害・知的障害・情緒障害などの障害や環境的な要因（育て方やしつけなど）が直接の原因となるものではありません。

学習障害のある子どもに見られる困難の例

《学習の問題》

聞く・話す

- ・聞こえていても、ことばや話の理解が難しい。
- ・1対1では話が分かるのに、集団の中での話の聞き漏らしが多い。
- ・自分の言いたいことをうまく表現することが苦手である。

読む・書く

- ・教科書を読む時、同じ行を何度も読んだり、行をとばしたりする。
- ・鏡文字を書いたり、形が整わない文字を書いたりする。

計算する

- ・繰り上がり繰り下がりのある計算ができにくい。
- ・計算はできるが、文章題になると難しい。

《その他の問題》

社会性

- ・周りの状況を理解し、それに合うような行動をすることが難しい。

運動能力

- ・手先がかなり不器用で、学習道具などがうまく扱えない。
- ・なわとび、ボール運動などの協調運動が苦手である。

注意集中・多動

- ・注意を持続することが困難で、落ち着きがない。

※ これらの困難が見られる場合でも、すべてが学習障害ということではありません。

注意欠陥／多動性障害(ADHD)ってなあに？

Attention Deficit / Hyperactivity Disorder

「注意欠陥／多動性障害」とは、年齢あるいは発達に不釣り合いな注意力、衝動性、多動性を特徴とする行動の障害で、社会的な活動や学業の機能に支障をきたすものです。また、行動の特徴は7歳以前に現れ、その状態が継続します。

子どもの実態によっては、学校と医療機関が連携しながら対応することが必要です。

注意欠陥／多動性障害のある子どもに見られる問題の例

《不注意》注意や集中が適切にできない。

- 細かいところに目を向けられなかったり、うっかりした間違いをしたりする。
- 学習課題や遊びの活動に集中し続けることが難しい。
- 話しかけられても聞いていないことが多い。
- 注意がそれやすい。
- 物の置き場所を忘れたりなくしたりが多い。

《多動性》不適切で目的のない行動をとってしまう。

- 学習中座っているべき時などに、立ち歩いたり教室を出ていったりする。
- 落ち着きがなく、常に体のどこかを動かしている。
- しゃべりすぎる。

《衝動性》考える前に行動をしてしまう。

- 順番を待つことが難しい。
- 質問の途中で出し抜けに答えてしまったりする。
- 友だちの会話や行動などを妨害したり邪魔したりする。

※ これらの特徴は、注意欠陥／多動性障害のない子どもにも見られることがあります。しかし、「注意欠陥／多動性障害」の場合は、これらの行動がいろいろな場面でしばしば見られる、発達段階にふさわしくない行動パターンが定着してしまう、といった不適応状況が見られる場合を指します。



学習障害(LD)と注意欠陥／多動性障害(ADHD)の関係



学習障害 (LD) と注意欠陥／多動性障害 (ADHD) とは違うものですが、両方が合併している場合もあるために「LD = ADHD」と勘違いされやすいのです。



中枢神経系の機能障害

↓
認知（情報処理）過程の機能不全

↓
学習上の基礎的能力の著しい習得や使用の困難

↓
教科学習の困難

中枢神経系の機能障害

↓
行動のコントロールの困難、認知（情報処理）過程の機能不全

↓
行動の問題や困難

二次的障害

自信・意欲の喪失、自己評価の低下

学習の困難に対する支援

支援の基本

指導内容のsmallステップ化

学習速度への配慮

繰り返しの指導

教材の具体化

フィードバック

※ これは、LD 等の子どもたちだけに有効なのではなく、学習上特別な配慮を要するすべての子どもに当てはまる指導の基本です。

支援のポイント

◆ 分かりやすい情報提示の工夫

- ・ 耳からの情報、目からの情報がきちんと入っているかどうか確認し、分かるように提示する。



◆ 個に応じた目標設定

- ・ 絞り込んだ具体的な目標を設定する。
- ・ 少しがんばれば達成できる目標にし、できたときはしっかりほめる。

◆ 得意なことを生かす

- ・ 自信をもっていることや得意なことを学習の中に入れるようにし、達成感や成就感につなげる。

できないことによって自信や意欲をなくし、不適応などの二次的障害を引き起こさないような配慮が必要です。

◆ できる状況づくり

- ・ 本人がうまく学習したり活動したりできるような教材や教具を使ったり、必要なら手伝ったりする。

具体的な支援の例

聞くことが困難な子どもには

- ・ 名前を呼び、注意を促してから話しかける。
- ・ 言葉だけではなく、動作、絵、図表、書字などの視覚情報も一緒に示しながら話す。
- ・ 分かりやすい言葉で簡潔にゆっくりと話す。



読むことが困難な子どもには

- ・ 見やすいように文字を大きくしたり、間違いやすい文字にラインを引いたりする。
- ・ 読もうとする行以外の行は厚紙などで隠す。
- ・ 読めない漢字には事前にふりがなをふっておく。



書くことが困難な子どもには

- ・ なぞり書きから始めて、徐々に視写できるようにする。
- ・ 文に書きたいことは、まず話すことによって内容を整理し、短冊に書いて順番に並べてから書くようにする。
- ・ ワープロを使うなど、書くことへの抵抗感を少なくする。



計算が困難な子どもには

- ・ 数の合成・分解が確実にできるように具体物、半具体物を用いて、数字と数量をしっかりと対応させる。
- ・ 計算の手順を書いたボードを示す。
- ・ 筆算ではマス目のあるノートを使い、桁がそろえるようにする。
- ・ 図や絵を書いて、問題を視覚的に捉えられるようにする。



行動の問題に対する支援

支援のポイント

◆望ましい行動のほめ方

- ・よいところを見つけて具体的にほめる。
- ・「やればできるじゃない。」といった指摘や「珍しいことがあるね。」といった皮肉を交えないでほめる。
- ・シールなど成果が目に見えるものを活用してほめる。

◆自己有用感を高める指導

- ・まわりに認められたり、他者を手助けしたりするような経験の場を意図的に設定する。

◆注意の持続時間への配慮

- ・注意の持続が難しいことを理解し、課題の量を他の子どもたちより少な目にする。
- ・座学の目標時間を短時間からスタートし徐々に長くしていく。

◆望ましくない行動への対応

- ・頭ごなしに叱らないで、望ましくない行動の裏にある理由を考えたり、本人に尋ねたりすることを心がける。
- ・行動にいちいち反応しないで、場合によっては意図的に反応を控えながら見守る。
- ・一貫性のある対応をする。



子どもをありのままに受け止めることは大切ですが、無条件でなんでも許してしまわないようにしましょう。望ましくない行動が定着しないようにすることが大切です。

◆分かるような伝え方

- ・指示が分からなかったりやり方や行動の仕方が分からなかったりしないか確認し、伝え方などを工夫する。



◆無理のないめあての設定

- ・めあてを絞り、望ましい行動の習得をめざす。
- ・子どもと一緒に達成できたかどうか確認し励ます。

◆衝動行動のコントロールのための指導

- ・めあてを一緒に決めて、それを書いたカードを携行する。
- ・その場で深呼吸、静かに目を閉じるなどの行動を習慣化する。
- ・行動をことばで表現できるように指導する。

具体的な支援の例

考える前に行動してしまう子どもには

- ・不適切な行動をした場合には、そのときの気持ちをじっくり聴き取り、どうすればよかったかを一緒に考える。
- ・自分の気持ちや行動を言葉で表せるようにしていく。
- ・危険な行為は強く、短く叱る。

興奮しやすい子どもには

- ・困った時や嫌なことがあった時の対処の仕方を具体的に教える。
- ・感情をうまく抑えることができた場合はしっかり認めてほめる。
- ・興奮し泣きわめくような場合は、過度に反応せず注意深く見守る。



落ち着けない子どもには

- ・「5分」といった目標を立て、着席行動を持続できたら、子どもが喜ぶようなものを用いてほめ、励ますようにする。
- 例) シールで **☆☆☆** よくできました。
- ・一日の始めにトランポリン等でしっかり動いて遊び、座学に備える。
- ・授業中や授業の合間に、黒板を消す、プリントを配る、先生の手伝いをするなど体を動かす機会を設ける。

物をなくしたり片づけができなかったりする子どもには

- ・子どもの持ち物は最低限必要な物だけにし、1つのランドセルやカバンに収まるようにする。
- ・自分の物と分かるように、名前を付けるのと同時に他の目印も付けておく。
- ・ロッカーや机の中に、そこに片づける物の絵カードを貼り付けて分かりやすくする。

Q & A

【Q1】 LDやADHDであると思われる子どもがいる場合、学級担任は何をすればいいのでしょうか。

【A1】 ○ 理解と実態把握

・まずは、学級担任がLDやADHDについての正しい理解をすることが大切です。次に、子どもがどんなところでつまづいているのか、どんな時に問題となる行動が見られるのか、また得意なことや好きなことは何か等々について、できるだけ客観的な実態の把握をするように努め、それを指導に生かしていくようにします。専門家の指導を受ける際にも、こうした情報の提供が必要となります。

○ 配慮した指導

・学級の中でできるいろいろな工夫や配慮をしながら指導していくことになります。

【Q2】 LDやADHDの子どもの支援は全校で進めるように言われていますが、具体的にどうすればよいのでしょうか。

【A2】 ○ 共通理解と一貫した指導

・全職員が全校の児童生徒に関わるという視点に立ち、まずLDやADHDについての研修会を行い、共通理解をし、一貫した指導をしていく必要があります。

○ 支援のための組織づくり

・指導の方針や目標、方法などについては複数の教員で検討していくことが必要です。そのためには新たに委員会を設けることも考えられますが、すでにある委員会（校内就学指導委員会、生徒指導委員会など）を利用してその中で話し合っていく方法もあります。いずれにしても、校内組織の中に、支援のための委員会をきちんと位置付け、継続的に話し合うことが大切です。

○ 専門機関・専門家との連携

・医療機関や教育センター、専門的な知識や技能を有する専門家の協力を得ることも必要になります。そのためには連絡調整をするコーディネーター役を決めておくことも必要です。

【Q3】 周りの子どもたちに対して、どのような配慮や指導をすればよいのでしょうか。

【A3】 ○ 個性や違いを認め合う学級づくり

・全ての児童生徒が自分自身も大切にされていると感じられる、また、必要な時にはいつでも助けてもらえるような学級経営をしていくことが重要です。
・小学校低学年では、「○○さんは、こんな気持ちなのかもしれないね。」とか、「こういう言い方をすると分かってくれるよ。」など、本人の立場を代弁したり、援助の方法を具体的に話したりすることが大切です。
・小学校高学年以降では、自分や相手を客観的に見ることができるようになるので、相手の立場で考えたり自分の問題として考えたりさせる指導も必要になります。

○ 教師の姿

・子どもは、教師が適切な支援をしている姿を見て学びます。

【Q4】 二次障害が大きくならないようにするには、どんなことに気をつけねばならないのでしょうか。

【A4】 ○ 自尊感情の育成

・LDの子どもは学習の困難から自信や意欲をなくしたり、自己評価を下げてしまったりしがちです。また、ADHDの子どもは、小さい頃から叱られたり注意されたりすることが多く、やはり自己評価が低くなりがちです。できるだけ自尊感情（セルフエスティーム）がもてるような支援をしていくことが必要です。

○ 教師の意識改革

・「どうしてこんなこともできないんだろう。」「全然言うことを聞かない困った子だ。」という意識から「どのようにしたらできるかな?」、「言っていることが分かってないのかも知れないな。分かるように伝えよう。」といった意識に変えていく必要があります。



【Q5】 保護者と子どもの教育に
な配慮をすればいいのでし

ついて話をする時には、どん
よう。

【A5】 ○ 信頼関係づくり

・問題となることや保護者への要望も受けとめながら、よりよい姿勢が必要です。
・日頃から連絡帳等で子どもの様問題点ばかりではなく、よかつさないで伝えていくことが大切

望を一方的に話すのではなく保護者の思いや
い指導のあり方を一緒に考えていこうとする
子について連絡を取り合うようにしますが、
たことや本人なりに頑張ったことなどを見逃
です。



他の障害との違いは…

LD、ADHD、知的障害、自閉症は、脳に何らかの原因があると推定されます。障害という点では共通していますが、それぞれが違う基準で判断（診断）されます。担任や保護者が、LD とか ADHD かもしれないと疑ったり気付いたりした場合、すべてがそうではなく、軽度の知的障害であったり、自閉症であったり、単なる学業不振であったりする場合もあります。子どもの特性を理解しながら、具体的な支援の手だてを考えていくことが大切です。

■ LD と知的障害の違い

LD は全般的な知的発達に遅れはないので、知的障害ではありませんが、知能と学業成績のアンバランスや個人内のできることとできないことの著しいアンバランスがあります。知的障害児の中にもできることとできないことのアンバランスが見られることもあります。明らかに知能の遅れが見られる場合は知的障害であり、LD とは言いません。

■ LD、ADHD と自閉症の違い

自閉症は3歳頃までに、その特徴（友達と遊ばない、ことばの遅れがある、こだわりが強いなど）が現れることが多いのに対し、LD の場合は学齢期になって明らかになることが多いのです。また、自閉症に多く見られる不注意、多動性、衝動性は ADHD とよく似ていますが、コミュニケーションが一方的であることや物への対応に不自然さがあることなどは自閉症特有の症状で ADHD にはほとんど見られません。

■ LD と学業不振との違い

学業成績が広く落ち込んでいる状態を学業不振と言いますが、何らかの理由で十分な教育の積み重ねがなされなかった結果、学習の遅れが生じた場合は LD とは言いません。

学習障害（LD）等についての相談機関

（詳細について知りたい場合は、まず電話でお問い合わせ下さい。）



- ◆ 松江教育センター 教育相談課特別支援教育班 (0852-22-6466、6467)

教員や幼児児童生徒、保護者への教育相談を行っています。

- ◆ 松江教育事務所 学校教育班 (0852-32-5772) ◆ 出雲教育事務所 学校教育班 (0853-30-5682)
◆ 浜田教育事務所 学校教育班 (0855-29-5706) ◆ 益田教育事務所 学校教育班 (0856-31-9673)
◆ 西郷教育事務所 学校教育班 (08512-2-9775)
◆ 県教育庁 高校教育課特別支援教育室 (0852-22-5420)

— 参考引用文献等 —

- * LD の教育 — 学校におけるLDの判断と指導 — (上野一彦他 日本文化科学社)
* 学習障害 (LD) 及びその周辺の子どもたち — 特性に対する対応を考える — (尾崎洋一郎他 同成社)
* ADHD 及びその周辺の子どもたち — 特性に対する対応を考える — (尾崎洋一郎他 同成社)
* 今後の特別支援教育の在り方について (中間まとめ) (特別支援教育の在り方に関する調査研究協力者会議)